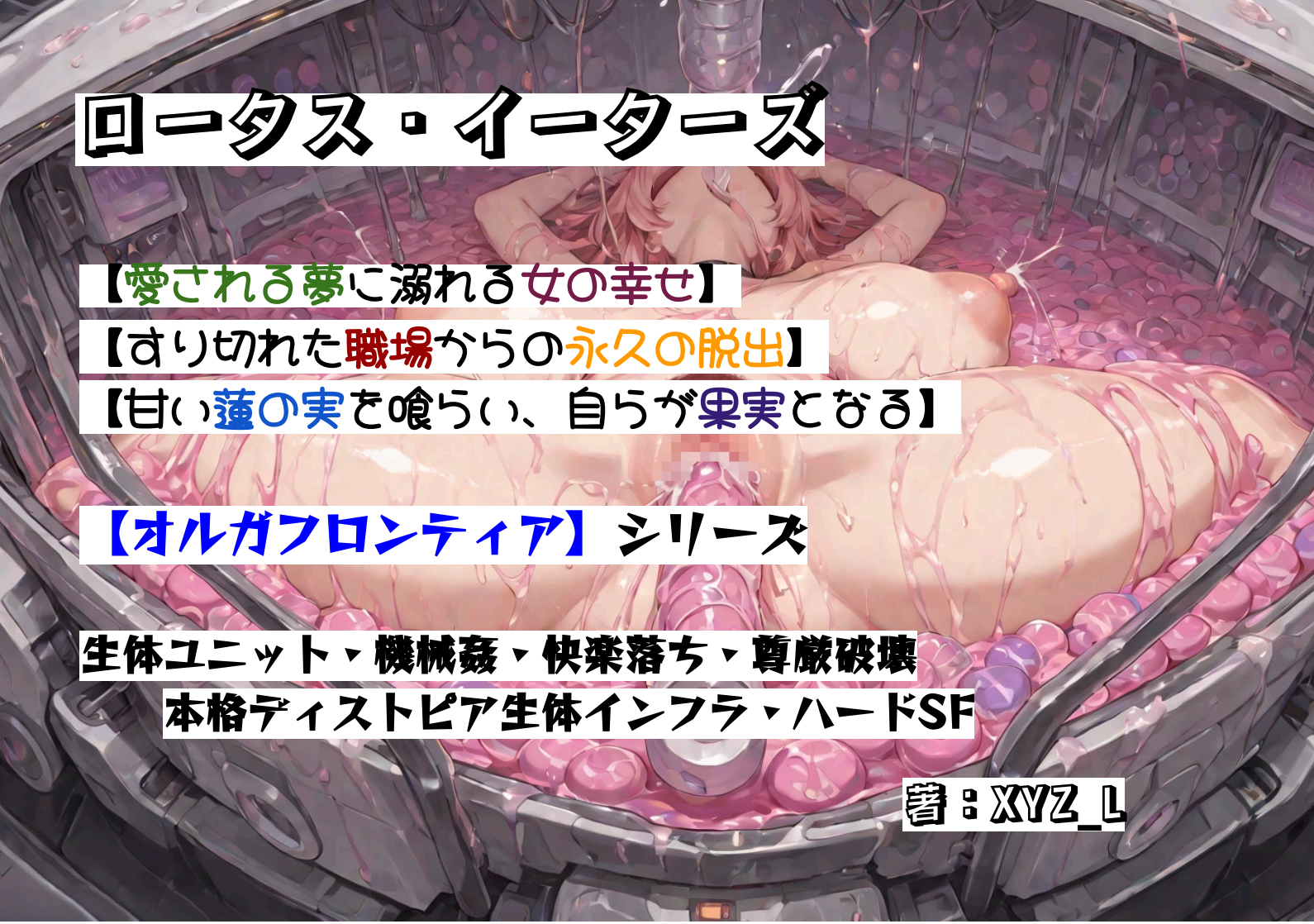

ロータス・イーターズ
【愛される夢に溺れる女の幸せ】
【すり切れた職場からの永久の脱出】
【甘い蓮の実を喰らい、自らが果実となる】
【オルガフロンティア】シリーズ
生体ユニット・機械姦・快楽落ち・尊厳破壊
本格ディストピア生体インフラ・ハードSF
著：XYZ_L

ロータス・イーターズ



女の子を生体ユニットにして使い潰しちゃう系

ディストピア・ハードSF・宇宙インフラモノ

「オルガ・フロンティア」シリーズ

著:XYZ_L

1. 疲弊

耳元を削るような無機質なアラーム音で、私は意識を泥底から引きずり出された。

聖暦2056年。

ペルセポネ軌道の混乱が遠く響く中、ネオ・テラン・シンジケート（N.T.S.）が管轄する小惑星フロンティア採掘基地、第12ブロック。

低重力特有の鈍い浮遊感が残る共同居住区の狭隘なスロットベッドは、昨夜の疲労を何一つ癒やしてくれてはいなかった。

薄いマットレスから半身を起こすだけで、軋む関節が鈍い痛みを訴える。

私はベッド脇の冷たい配給機から注がれる安価な合成清涼水を一気に喉へと流し込み、乾ききった口腔を湿らせた。

過酷な交代勤務に追われ、手入れをする余裕すら奪われた陰毛が、粗末な下着の奥で鬱陶しく肌を擦る。

除毛どころか、鏡を見る時間すら惜しい。

胸元に擦り切れたN.T.S.のロゴが印字された官給品の作業ツナギに重い両腕を通し、首元までジッパーを引き上げた。

足を踏み出した共同通路には、削岩機が発する低周波の重低音が床を通じて絶え間なく伝わっていた。

換気フィルターの限界を告げる淀んだ空気の中、鉱物油と焦げたオゾンの匂いが漂う。

勤怠管理端末のセンサーに個人IDをかざすと、機械的な電子音が事務的に出勤を記録した。

薄暗い通路ですれ違う男性採掘員たちが、私を一瞥していく。

ネオ・テランの厳格な契約社会において、企業の契約資産として法的に保護された私に向けられるのは、獣じみた暴力的な欲望などではなかった。

彼らの瞳にあるのは、重機の発電席で股間に器具を挿して電力を供給する、代わりの利く底辺OLに対する冷淡な値踏みと、無機質な無関心だけだった。

採掘ハンガーに鎮座する、傷だらけのシビック・リグの横腹にあるハッチをくぐる。

複座式の狭いコックピットは、オイルと埃、そして隣に座るオペレーター・タカギの汗の匂いが混ざり合い、息苦しいほどに狭い。

「……アカリさん、今日もよろしく。Bコア頼んだよ」

タカギは視線を計器に向けたまま、感情の抜けた声で言った。

「はい……っ」

私は小さく息を整え、彼の操縦席のすぐ左脇にある私の職場――Bコア・ステーション、すなわち発電席に深く沈み込んだ。

削岩現場の粉塵と冷気から肌を守るための無骨な作業ツナギ。

その首元から股下を通り、臀部の尾骨上部まで一本の2way工業用ファスナーが走っている。

私は下側の金属スライダーに指をかけ、背中側へ向けて一気に引き上げた。

ジジジと鈍い噛み合わせの音を立ててスライダーが走り、作業着の股下が左右へ大きく割り開かれる。

露出した下着のクロッチに指を引っ掛け、太ももの脇へと強く押し開いた。

フィルターを通しただけの冷たい空気が、汗ばんだ恥丘と、手入れされていない剥き出しの茂みを容赦なく撫でる。

リクライニングチェアのような座席に組み込まれた、医療グレードの滑らかなオルガデバイスが、油圧の微かな音と共に自動でせり出してきた。

人肌に近い弾性樹脂で覆われた太径のシャフトが、鈍い光を反射しながら角度を持ち上げる。

意を決して腰を浮かせ、その先端を自らの湿り気のない膣口に宛がった。

体重を預けると、デバイスは潤滑を欠いた乾いた粘膜を無理やりに擦り広げながら奥深くへと進入し、子宮頸部の聖杯体と呼ばれる炉心へと深く突き当たった。

「……っ、ふ……ぅっ……！」

いつもの、内側から満たされる異物感。

奥深くを穿たれる鈍い圧迫痛と、下腹部を貫かれる重苦しさは、何百回繰り返しても決して消えることはない。

『システム、オンライン。プラトー維持モードに移行します』

座席脇の相転移整流インバーターが甲高い唸りを上げ、デバイスのシャフトから微弱な高周波パルスが発振された。

すぐに微弱な振動が始まり、私の神経をじわりと焼き始める。

膣壁が鬱血して熱を持ち、潤滑のない摩擦痛の隙間から、じっとりと滲み出た微量の愛液がシャフトとの隙間をぬめらせた。

子宮頸部がキュンと甘く引き締まり、下腹部の奥底から「イきたい」という生理的な疼きが波のように突き上げてくる。

だが、快感に身を任せることは許されない。

イキそうになる衝動がせり上がるたび、私は息を細く吐き出し、膣の力を抜いて、立ち上がりかけた快感の芽を自ら必死に散らし続けなければならなかった。

イキたいのに、自分で快感を殺し続けなければならない永遠の生殺し。

頭上で、ガコンと巨大な油圧ショックが響いた。

シビック・リグの削岩アームが、破砕された数トンの鉱石ブロックを鷲掴みにして持ち上げる。

（絶対に……イッちゃいけない……）

奥歯を噛み締め、私は冷や汗の滲む手で座席のグリップを握りしめた。

もし、いま私が絶頂を迎えてしまえば、アームの電磁サーボ弁への給電が一瞬で途絶える。

数トンの岩盤を動的にねじ伏せていたリアルタイムの加圧制御が死に、高価な二重安全弁すらケチられたオンボロ重機の油圧配管が、激しいサージ――作動油の水撃作用によって一瞬で吹き飛ぶのだ。

グラップルの鉄の爪が滑り落ち、バランスを崩して跳ね上がったアームの猛烈な反動と落下の質量がコックピットの天板を押し潰す。

そのまま数百メートルの竪坑の底へ真っ逆さまに墜落して、私とタカギは原形も留めないミンチになって圧死するのだ。

女性アセットが性的絶頂に達した瞬間、脳幹の過負荷保護とシステム側の安全回路が働き、全給電が強制遮断される。

わずか約0.8秒間の完全な沈黙。

現場の誰もが呪いのように骨の髄まで叩き込まれる業界の絶対法則――「オルガ・パラドックス」。

たったコンマ数秒の制御喪失が、確実な死に直結する。

私の仕事は、この重機を動かすための電力を、8時間の勤務中ずっと安定供給し続けること。

すなわち、太い樹脂シャフトに子宮を穿たれたまま、決してイってはならない管理された興奮状態――プラトーを、死ぬ気で維持し続けることだった。

だが、死の恐怖に耐えながら神経を研ぎ澄ませようとする私の心を、内側からじわじわとすり潰すものがあった。

（……また、サナエ先輩に嫌味を言われる……）

脳裏に浮かぶのは、Bコア業務のリーダーであるサナエの冷たい視線。

「アカリさんはノルマぎりぎりね。隣のオペレーター、タカギさんに迷惑かけないでよ？」

死線の上で張り詰める精神に追い打ちをかける、あの逃げ場のない声。

肉体の苦痛と職場での陰湿なプレッシャーの挟み撃ちが、私の慢性疲労を加速させていた。

6時間が経過した。

VRゴーグルが提供する退屈なドラマにも意識は向かず、疲労と重圧で興奮の波が途切れてしまう。

下腹部から熱が急速に引き、アームの破砕トルクが落ちて作業が停滞しかけた。

コンソールの出力インジケーターが警告色に点滅する。

「……アカリさん。また出力、20%ダウン。寝てるの？」

ヘルメット越しに響くタカギの無機質な声に、心臓が跳ねる。

「す、すみません……っ！ すぐ、戻します……！」

（ダメ、集中しないと。ノルマを割ったら、またタカギさんに刺激ブースト・ボタンを……！）

焦れば焦るほど、思考は冷静になり、興奮は遠のいていく。

「あーあー、ダメじゃん。こっちの作業止まるんだけど」

忌々しげな舌打ち。

タカギの左手が操縦レバーを手前へ一気に引き倒した。

削岩アームの油圧グラップルが岩盤を離れ、キャビンの天板を軋ませていた数トンのねじれ荷重がふっと抜ける。

アームは自重支持用の固定ラッチへと鈍い衝撃音を立てて引き戻され、コンソールの圧力インジケーターが無負荷の緑色へと滑り落ちた。

荷重が、抜けた。

機体が竪坑へ落ちる危険がないと察知した、まさにその刹那だった。

タカギは迷いなく、操縦桿の刺激ブースト・ボタンへ手慣れた親指を深く押し込んだ。

インバーターの瞬間過負荷と連動し、油圧シャフトの硬いヘッドが、子宮頸部最奥の聖杯体をドスンと物理的に強く突き上げた。

打撃の衝撃と同時に、デバイスの先端から高圧の励起パルスが直撃し、乾いた粘膜を容赦なく焼き打つ。

「ひゃうッ！？ あ、ぁ……ッ！」

轟音を立てるエンジン音とは別に、私の体内だけを貫く、暴力的でけたたましい振動が始まった。

激痛と狂おしい快楽の濁流に子宮が引きつり、限界まで過熱した聖杯体が強制的に相転移のサージを起こす。

私の体内から数メガジュール級のオルガパルスが爆発的に迸り、失われていた重機の電力が一気に跳ね上がった。

「や、やめ……！ ぁ、イ、イきま……ッ、出力、もど、戻りましたから……っ！」



腰が勝手に跳ね上がり、下腹部が猛烈に痙攣する。

子宮平滑筋が狂ったように強縮し、膣奥から愛液が強制的に噴き出した。

同時に仙骨神経叢が過負荷で殴打され、耐えきれなくなった膀胱括約筋が一瞬で決壊した。

熱い液体が太ももを伝う生々しい感覚。

熱い尿と分泌液の奔流が、手入れの行き届かないアンダーヘアにじっとりと絡みつき、内股を濡らしながらシートへと広がっていった。

びしゃびしゃと生々しい水音が狭いコックピットに響き渡る。

私は漏れそうになる甲高い声を必死に噛み殺し、荒い息を整えた。

隣のタカギは、まるでフリーズしたコンソールを強制再起動したかのように、再び作業アームの操作に戻っている。

彼の徹底した無関心さが、私をさらに惨めにさせた。

（……あ。漏れちゃった……）

Bコア・ステーションのシートが、自分の尿と愛液で濡れている。

太ももの裏に張り付く、生暖かい、惨めな感覚。

（どうしよう……。このままじゃ……）

屈辱よりも先に、現実的な恐怖が思考を支配した。

（……シート、汚しちゃった。退勤の時、自分で清掃しないと。もしタカギさんや、ましてやサナエ先輩に見つかったら、ノルマも達成できない上に、備品まで汚したって、何を言われるか……）

今月の僅かな手当すら、備品汚損のペナルティで削られてしまう。

やがて、終業を告げるサイレンが鳴り響いた。

タカギは私に視線すら寄越さず、無造作にコンソールのキースイッチを落とした。

外した操縦グローブを放り出すと、振り返りもせずハッチを開放し、キャビンから一人先に出て行った。

静まり返った狭い操縦席に残された私は、震える指先で備え付けの消毒ボックスを開けた。

安価なアルコールクロスを何枚も引き出し、座席に広がる自らの生暖かい尿と分泌液を、涙をこらえながら必死に拭き取る。

冷えていく体液は粘り気を帯び、拭うたびにツンとしたアンモニアの臭気と生々しい粘膜の匂いが鼻腔を突いた。

（早く……早く拭かないと……）

使用済みのクロスを作業着のポケット深くに押し込み、濡れた下着が内股に冷たく張り付く不快感に耐えながら、私は逃げるようにリグを降りた。

薄暗い通路を小走りで抜け、作業員用の共同更衣室へと駆け込む。

シフトの入れ替わり時で人気のないフロアの冷気が、汗と尿で冷え切った腰回りを芯から凍えさせた。

自分のロッカーへ手を伸ばした、その時だった。

ロッカー室の最奥、備品倉庫との境目にある薄いプラスチック隔壁の向こうから、ぐちゅり、という湿った肉の衝突音が微かに響いてきた。

息を呑み、身体を強張らせる。

「……んっ……あぁ……っ、タカギ、さん……奥、当たって……っ」

艶めかしい吐息と共に漏れ聞こえてきたのは、紛れもなく、あのサナエ先輩の声だった。

「……サナエさん、いい締め付けだ。昼間のリグじゃ、こうは抜けないからな」

「ふふ……っ、あんな使えない子の隣じゃね……っ。アカリのやつ、サインは……っ、ちゃんと書かせたんでしょうね……っ？」

荒い息遣いと共に、激しい水音が壁を震わせる。

「当たり前だろ。スコアまで削られてたまるかよ。ブーストで漏らさせて、単独過失で報告書は確定させといた」

「助かるわぁ……っ。あの子が落ちれば、来期の優良ブロックは私の班が先よ……っ。第14竪坑なんかに落とされてたまるもんですか……っ、んぁあっ、もっと、奥……ッ！」

肉が激しくぶつかり合う音と、保身と嘲笑を含んだ喘ぎ声が、冷たい更衣室に容赦なく木霊していた。

私はロッカーの陰にしゃがみ込み、自らの口を両手で強く押さえた。

歯の根がガチガチと鳴り、全身の血が引いていく。

最初から、仕組まれていたのだ。

作業が止まった、あの瞬間。

タカギが慌てもせずアームを引き戻し、油圧計の針が落ちたのを見届けてからボタンを押し込んだ、あの手慣れた動作。

あれは機体を守るためなどではなかった。

自分たちだけが安全圏に立ち、私だけに過失を着せるための段取りだったのだ。

私がどれほど痛みに耐えてプラトーを維持しようと、最初から意味などなかった。

私はただ、彼らが生き残るための踏み台にされただけだったのだ。

下着に染み込んだ自分の尿が、氷のように冷たく皮膚にこびりついている。

これが日常。

これが私の職場。

もう、限界だった。

シビック・リグ(Civic Rig：NTS-CIV-01)



ネオ・テラン・シンジケート（N.T.S.）資源開発部門が小惑星鉱区に配備する複座型削岩重機。

主油圧駆動系および岩盤破砕用電磁サーボ弁は、生体バッテリー（Bコア）のオルガパルスに完全依存する。

狭隘なコックピット内には操縦席と発電席が密着配置され、機械油、オゾン、粉塵、汗の臭気が充満する。

末端現場の機体は二重安全弁が省略されており、給電停止は油圧サージによる配管破裂や、数トンの削岩アーム自重反動によるキャビン圧壊事故に直結する。

操縦桿には出力低下を防ぐ強制励起スイッチ（刺激ブースト）を標準装備。

押下時は高周波パルスで出力を強制再起動させるが、仙骨神経叢への電位過負荷により高確率で強制失禁を誘発する構造的欠陥を抱える。

2. 見学

現場のリグの座席で味わわされたあの焼けるような衝撃と、自らの尿で濡れそぼった冷たい下着の不快感。

そして更衣室の薄いプラスチック隔壁越しに響いていた、タカギとサナエの湿った肉の衝突音。

泥のような絶望を全身にまとわりつかせたまま、私は採掘区画と居住タワーを結ぶ作業員用の連絡シャトルに揺られていた。

窓の外に広がる視界に、星空のロマンなど欠片もない。

乱雑に爆破掘削された内壁の玄武岩と、亀裂を覆う灰色のウレタン樹脂が無機質に流れていくだけだ。

そのゴツゴツとした岩肌に、蜂の巣のように幾何学的に積み上げられた安価なプレハブ住居カプセル群――居住タワーの外壁に映し出される巨大なホロ・ディスプレイを、私はぼんやりと眺めていた。

『――その“魂の疲労”に、究極の安らぎを。CB（シビック・バッテリー）業務従事者向け、転職プラン。安定供給型生体発電所【ロータス・ドリーム】、入所者募集中――』

暗い岩塊と煤けた鉄骨を背景にしたホログラムの中、眩い光の粒子に包まれながら、信じられないほど安らかな表情で眠る美しい全裸の女性が浮かび上がっていた。



『ちゃんとしたインフラ業務です』

天井スピーカーから響く、透き通ったクリーンなナレーション。

手当を削られる恐怖に怯え、油と体液をアルコールクロスで拭き取るような世界とは、完全に切り離された別次元の光景だった。

帰宅した自室もまた、薄いスチール板一枚で区切られただけの狭隘なスロットベッドに過ぎない。

頭上を這う老朽化した酸素配管のシューという排気音と、隣室の荒い寝息が筒抜けに響き、いつ気圧低下や落盤事故が起きてもおかしくない緊張感が、肌を常にピリピリと刺していた。

◇

翌日、私は発作のように端末から有給休暇の申請を送り、居住タワーの中央幹線リフトに乗り込んでいた。

見学エントリーによって端末へ一時発行されたセキュリティコードをかざすと、本来は底辺採掘員には立ち入りすら許されない最上層のボタンが静かに点灯する。

乗り合わせてくる上層職員や技術者たちは、シワ一つない身なりをしていた。

洗濯を繰り返して襟元がよれた安物の合成繊維シャツに、膝の抜けた作業用スラックス。

後ろで一本のゴムで無造作に束ねただけの、手入れする余裕すら奪われて毛先の傷んだ私の髪と、爪の奥に残る微かな鉱物油の黒ずみ。

昨日のアルコール清掃で水分を奪われ、白く粉を吹いてひび割れた指先を、私は周囲の冷淡な視線から逃れるように、反射的にポケットの奥へと押し込んだ。

露骨に距離を取る同乗者たちの無言の圧力に耐えながら、縦坑（シャフト）を急上昇するリフトの窓の外を見つめる。

下層の「剥き出しの配管と冷たい鉄骨」が、上層へ上がるにつれて「継ぎ目のない化粧パネルと大理石調のフロア」へと滑らかに切り替わっていった。

気圧の変化で耳の奥がキーンと鳴り、重力制御が滑らかに切り替わる。

昇降扉が横へスライドした先は、広大な中央トランジット・モールだった。

その一角、周囲の喧騒から分厚い気密ガラス隔壁で完全に遮断された区画に、目的の場所――ロータス・ドリーム専用のセキュリティ・レセプションが構えられていた。

認証ゲートに端末をかざし、エアシャワーを抜けてエントランスへと足を踏み入れた瞬間、私は思わず息を呑み、その場に立ちすくんでしまった。

空気が、違う。

第12ブロックに充満していた削岩粉塵や焦げたオゾンの気配は微塵もなく、肺の奥まで清らかに満たす完璧に管理された空調。

微かに漂う上品な合成アロマの芳香が、鼻腔を優しく撫でた。

大理石を模した光沢のある床面には天井の間接照明が柔らかく反射し、重機の耳障りな低周波などどこからも聞こえてこない。

そこは発電工場というより、選ばれた特権階級だけが足を踏み入れる高級ホテルのエントランスそのものだった。

すれ違うスーツ姿の職員たちに混ざり、泥の落ちきらない安全靴で床を踏む自分の存在が、耐え難い恥辱となって私を苛む。

まるで泥水に塗れた炭鉱夫が、ガラス細工のサロンに迷い込んでしまったかのような、身の縮む気後れ。

身を硬くして受付へと歩み寄った私を迎えたのは、第12ブロックでは見たこともないような、完璧な美貌を持つ女性ガイドだった。

「ようこそ、ロータス・ドリームへ。工場見学ツアーにご案内いたします」

人形のように滑らかな声と、一切の感情を排した完璧な微笑み。

彼女が身にまとっていたのは、首元まで肌を完全に覆い隠す、禁欲的な白いハイネックの制服だった。

しかし、その布地は恐ろしく薄く高価なナノ繊維で織り上げられており、第二の皮膚のように彼女の肉体へ吸い付いていた。

下着の継ぎ目など一切ない、恐ろしいほど滑らかな肌の起伏。

まるで濡れているかのように、豊かな乳房の丸みと、その先端で硬く尖った乳首の輪郭がはっきりと生地の表面へ浮かび上がっている。

きつくくびれたウエストから豊満な尻へと流れる曲線。

そしてタイトな制服が容赦なく張り付く、下腹部から股間にかけての完璧な隆起さえも、布越しに生々しく浮き彫りにされていた。

見る者の視線を釘付けにするために、計算され尽くした極限のラインだった。

人間味のない、完璧な美しさ。

彼女こそがこの施設の提供する完全な管理の、生きた見本だった。

ガイドの滑らかな足取りに導かれ、私は厚い強化ガラスで隔てられた薄暗い見学通路へと足を踏み入れた。

「うわ……」

「すげえな、コレは……」

前方を歩いていた数名の男性グループから、下卑た感嘆と笑い声が漏れ聞こえてきた。

身なりのいい管理職風の男たちが、露骨に喉を鳴らし、ガラスの向こうを指差して品定めを始めている。

「あそこのデカい乳の女、たまんねえな」

「ゲルが透明だから、器具が奥まで入ってくのが丸見えだな」

男たちの視線の先を追い、私は息を呑んだ。

そこには、巨大な夜のドームのような、底知れない空間が広がっていた。

天井の見えない広大なフロアに、蜂の巣のように幾何学的に整然と、何百という透明なドリーム・ポッドが青白い照明の中に並べられていた。

一つ一つのポッドの中には、全裸の女たちが、冷たい金属の医療フレームによって無防備に固定されていた。

手足をだらしなく大の字に開脚させられ、もっとも恥部である股間を、こちら側へ惜しげもなく晒し出している。

ポッドを満たす高透明度バイオゲルの中で、彼女たちの乳房が水流に押されてぷるんと揺れ、ピンク色の乳首が透けて見えていた。

艶やかな長い髪が、ゲルの微細な対流に乗って優雅にゆらめいている。

男たちの視線は、ガラス越しに晒された無数の生々しい秘部の割れ目や、デバイスが挿入されたアナルへと完全に釘付けになっていた。

「おい見ろよ、あいつ、いまイキかけてるぞ」

男の一人が息を荒らげ、ガラスに額をこすりつけるようにして指差した。

その視線を追った私の網膜に、一際美しい女性のポッドが飛び込んできた。

彼女の無防備に開かれた股間では、人肌に近い弾性樹脂で作られた半透明の太径デバイスが、内蔵アクチュエーターの微細な駆動音と共に、機械的な周期で滑らかに蠢いていた。

くちゅり、とゲルの中で粘膜が押し広げられる。

デバイスの肉厚なシャフトが、彼女の膣口を押し広げながら子宮頸部最奥の聖杯体を深く突き上げ、同時にアナルに深く呑み込まれたマルチラインが直腸の奥を淫らに刺激していた。

侵入された女性は、苦痛に歪むどころか、蕩けたような吐息を漏らし、腰を小さく震わせていた。

激痛や暴力的なパルスで理性を叩き割られた昨日の私とはまるで違う。

彼女は、機械から与えられる完璧なリズムの快楽にすべてを委ね、甘やかな絶頂の余韻にとろけるように身を委ねていた。

絶頂の瞬間、彼女の子宮口から熱い愛液がどっと溢れ出た。

だが、その分泌液がポッドを汚すことはなかった。

デバイスの根元に刻まれた無数の微細スリットが、溢れ出た体液を瞬時にバキュームで吸い込み、ゲルの循環流が瞬く間に分泌液をその場で吸って分解する。

どれほど激しくイかされても、ゲルは一切濁らず、水晶のような透明度を保ち続けていた。

男たちはガラスに額をこすりつけるようにして、品定めするように女たちの蜜壺や尻を、いやらしい笑みを浮かべて舐め回している。

通路のスピーカーからは、彼女たちの生の悲鳴や水音は一切届かない。

代わりに、ヒーリング音楽に混ざって、AIが演出したであろう快適そうな吐息が、環境音として微かに流れていた。

（……嫌だ）

背筋を冷たい悪寒が駆け抜けた。

（あんな風に、見られるなんて……。男たちの下卑た視線に晒されて、まるで動物園じゃないか）

可搬式生体発電スロット「B-ラック」

(Portable Olga-Rack：NTS-CIV-R02)



ネオ・テラン・シンジケート（N.T.S.）資源開発部門が現場事務所や前線プレハブ、資材コンテナに配備する可搬式の箱型オルガ発電ユニット。太陽光の届かない小惑星深部において、通信端末や生命維持ポンプ、空調へ安定した電力を供給する。

容積効率を突き詰めた縦型キャビネット構造となっており、重機（シビック・リグ）から出力低下で降格された型落ちBコアや、懲罰対象となった女性労働者が全裸で封入される。内部では電磁ロックフレームが両脚を左右へ大きく割り開かせたガニ股姿勢で骨盤を固定。工業用シャフトが膣奥の聖杯体を捉え、直腸プラグが栄養注入とアンカー固定を一手に担う。

正面扉の分厚い点検窓からは内部の稼働状態が常時視認でき、設備の電力要求に応じてインバーター連動シャフトが自動で微振動を励起。女性の激しい痙攣と呻き声を引き換えに、現場の電圧を一定に保ち続ける。

作品名：ロータス・イーターズ

発行日：2026年10月10日

発行者：XYZ_L

連絡先：https://bsky.app/profile/xyz0080.bsky.social

【注意事項】

本作には強度の尊厳破壊、生体部品化、および救いのない結末などの過激な表現が含まれております。フィクションとしてお楽しみいただける方のみご閲覧ください。

【AI生成技術の利用について】

本作の表紙および挿絵などの画像は、AI画像生成技術を利用して出力したものをベースに、加筆修正やレイアウト調整を行って作成しております。

【禁止事項】

本作のテキスト、画像を含む一部または全部の無断転載、複製、改変、Web上への無断アップロード（SNS、動画サイト、ファイル共有サイト等を含む）を固く禁じます。